



Title	音楽教育における表現活動の考察 [] -即興劇「わがままなシンデレラ」の実践を通して-
Author(s)	大屋, 省子; 古田, 庄平
Citation	教育実践研究指導センター年報, No.9, pp.43-47; 1997
Issue Date	1997-07-02
URL	http://hdl.handle.net/10069/25913
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T18:30:54Z

音楽教育における表現活動の考察 [I]

—即興劇「わがままなシンデレラ」の実践を通して—

大屋 省子*

古田 庄平**

はじめに

本研究は、筆者が参加している「子どものためのドラマスクール」〈註1〉において「子どもミュージカル『こどもの時間』」〈註2〉の前段階として、これまでに実践されてきた即興劇「わがままなシンデレラ」と、その劇中で歌われる『さびしいシンデレラ』の演奏を通して、子どもの主体的な音楽的表現活動及び創造活動による豊かな感性の育成について考察を行なったものである。

1. 「わがままなシンデレラ」と『さびしいシンデレラ』

(1) ドラマスクール

子どものためのドラマスクールは、子どもの表現力・創造力を開発、向上させるという芸術教育的側面を有するもので、子どもの遊びの本質である自発性、主体性、創造性、協調性を引き出しながら、それを表現する楽しさや、仲間と共有する楽しさを体験させるという教育プログラム【表1】によってスタートしたのである。このレッスンは、月2回のペースで、小学校1～3年生22名の1クラス、4～6年生29名の2クラス、中・高校生28名の1クラス（福岡地区）と小学校1～5年生31名の1クラス、小学校6年～中・高校生22名の1クラス（飯塚地区）に分かれて行なわれている。1回のレッスン時間は、90分である。

そこでは、即興劇「わがままなシンデレラ」を創作し、発表してきた。

(2) 「わがままなシンデレラ」

制作スタッフは、ドラマスクールのレッスンを子ども達に4回学習させた段階で、即興劇「わがままなシンデレラ」の創作を試みた。この創作は、平成8年9月22～23日、“福岡市立背振少年自然の家”での合宿において行なわれた。

即興劇「わがままなシンデレラ」は、太宰久夫氏（玉川大学文学部芸術学科助教授）が設定した「わがままなシンデレラ」構成一覧【表2】の登場人物や環境構成5W1H（いつ、どこで、誰が、何を、どのように）を骨組みとして、子ども達が話し合いながら具体的なストーリーを【表3】のようによまとめたものである。

*長崎大学教育学部音楽科非常勤講師

**長崎大学教育学部音楽科教室

この「わがままなシンデレラ」の学習では、あらかじめ「動き」の段取りや「せりふ」などを決めておかないで即興的に表現しようという約束を設けられて始められた。

(3) 『さびしいシンデレラ』

歌『さびしいシンデレラ』は、まず、前述した子ども達の即興表現による「わがままなシンデレラ」の演技を観察しながら、その即興的な「せりふ」と「動作」に合った音楽を即興演奏者の高橋修二氏が、シンセサイザーで表現し、それをもとに子ども達が高橋氏と話し合いながら作った歌詞「私はさびしいシンデレラ、ひとりぼっちのシンデレラ。思い出すのは、優しい母さんの、あの瞳。」に旋律を付けていった。

子ども達は、即興的にうたいながら、いろいろ勝手な旋律を付けて歌の創作を楽しんでいたのですが、最終的には、【譜例1】のような歌として発表された。

また、「わがままなシンデレラ」構成一覧にはない予定外の歌（ジョン・レノン作曲『レット・イット・ビー』）が子ども達の創作による「わがままなシンデレラ」ストーリーの第Ⅶ場面でうたわれた。これは、シンデレラ役の高校2年生の男子生徒が、「みんなで力を合わせて悪人を退治した喜びをうたいたい」と自主的に挿入したものである。

2. 「わがままなシンデレラ」における音楽活動

「わがままなシンデレラ」における音楽活動は、歌『さびしいシンデレラ』や『レット・イット・ビー』の演奏に見られたように、子ども達の内面から湧き出る感情を生き生きと音楽的に表現しようとする表現活動であって、これは、音楽を単なる知識として理解させようとしたり、技能の機械的な訓練のみにとらわれず、感覚的側面を重視した学習であった。

子どもが、内面から湧き出る感情を表現しようと自主的にうたい始めた時、そこで大人が発声法などの理論や方法を教え始めると、その瞬間、子どもの主体性が抑圧されて子どもの声はたちまち固くなり、小さくなってしまう。どんな声でうたい始めたとしても、歌詞の発音が明瞭でなかったとしても、まずは、歌に込める気持ちを尊重し、子どもを勇気づけて愉快的気分させる雰囲気作りを行なう事が重要である。そうすれば、小さな声は次第に大きくなり、表情豊かな響きのある声へと変化し、歌詞も明瞭になっていくのである。

「わがままなシンデレラ」の発表会では、第Ⅴ、Ⅵ場面で創作される予定であった歌が完成しなかった。しかし、子ども達が即興的にうたいながら、いろいろ勝手な旋律を付けて歌の創作を楽しんだプロセスは、子どもの音楽的創造活動を培っていく貴重な学習体験であったと思われる。そして、第Ⅱ場面における『さびしいシンデレラ』と第Ⅶ場面における『レット・イット・ビー』の演奏に見られた生き生きとした音楽表現は、次のミュージカル『こどもの時間』において、さらに輝きを増したすばらしい音楽表現活動に発展するであろう。

子どもの指導に携わる大人は、結果ばかりに捕われるあまり、往々にして、つい大人の知識や技術を子どもに押しつけてしまいがちである。しかし、大人は、子どもの学習過程において、子どもの内面で育まれている音楽的成長を信じ、じっくりと見守ってやるべきではないだろうか。

おわりに

音楽科教育における表現活動は、「子どものためのドラマスクール」における表現活動とも深く関わっているので、それを学校教育における音楽学習に生かせるならば、さらに有益な学習効果が期待できると思われる。

尚、意を語り尽くせなかった部分、及び平成9年8月17日、24日公演予定のミュージカル「こどもの時間」に関しては、別の機会に稿を改めて述べたい。

<註>

<註1>子どものためのドラマスクールは、福岡県、福岡市、財団法人アクロス福岡、飯塚コスモスコモン、福岡県子ども劇場連絡会が主催する社会教育の場における子どもの芸術・表現・創造活動育成事業として企画、創設されたもので、表現教育に関する高い水準の理論と実践、及び人材を育成し、地域に根づかせるという展望を持つものである。

参加者は、制作スタッフの他、一般公募したボランティアスタッフ（福岡市26名、飯塚市19名）と小学校1年生から18歳までの子ども（福岡市108名、飯塚市53名）である。

筆者は、平成8年5月に開始された「スタッフ養成講座」、7月に開始された「子どものためのドラマスクール」を経て、平成9年8月発表公演予定の「子どもミュージカル【こどもの時間】」まで、ボランティアスタッフの一員として参加することにした。

<註2>ドラマスクールの講師として招かれた太宰久夫氏（玉川大学文学部芸術学科助教授）の指導・監修のもとに、各分野における専門スタッフとの綿密な協力体制によって、ミュージカル【こどもの時間】が企画・制作された。

ミュージカル【こどもの時間】は、ドラマスクールにおける子どもの表現・創造活動の中から、場面や人物、歌、ストーリーをくみあげ、構成し、磨き上げていく手法で脚本が構成される。そして、その脚本をもとに、子ども達は演出家、音楽家、振り付けなどの専門スタッフと共に、思う存分遊び、歌い、踊り、イメージを広げながら、ミュージカル上演までのプロセスを体験していくのである。

【表1】 ドラマスクールの教育プログラム例

動きを中心にした遊び	
〈ジャンケン 追いかっこ〉	クラス全員で一斉に一回ジャンケンを行なう。勝った人が負けた人を追いかける。
〈自己紹介〉	「○○のように見えるけれど、実は○○な○○○○です。」という様式のポーズをつけて自己紹介を行なう。
〈空想名刺交換〉	自分の好きなキャラクターの名刺を作成する。その名刺を交換しながら、作成したキャラクターを売り込む。
創造性を中心にした遊び	
〈想像の縄で行なう 大縄飛び〉	大縄があると仮定する。その想像した縄を二人で回す。回っている大縄を、みんなで次々と飛んで行く。
〈想像のボールで行なう ドッチボール〉	ボールがあると仮定する。その想像したボールを使ってドッチボールを行なう。
〈3ポイントシアター〉	5～6人のグループ毎に、昔話や童話、学校で起きる出来事などの中からテーマを決め、場面設定を行なう。3つのポーズで表現する場面とテーマが何であるかをその他のグループ全員で考える。
〈ミュージックイメージ〉	仰向けの状態で横になり、深呼吸しながら体と心をリラックスさせる。約3分間音楽を聴く。音楽を聴いて浮かんだ情景を6～7名のグループに分かれて一人ずつ言葉で表わす。また、流れる音楽のイメージに合わせてポーズを取ったり、体を動かしながら踊ったりする。

【表2】 「わがままなシンデレラ」構成一覧

場面	登場人物	ストーリー	ネズミの動き	歌
I 屋根裏の ネズミ達	ネズミ	ネズミの世界の紹介	ネズミ語と通訳	×
II 駆け込んでくる シンデレラ	1シンデレラ, 父 継母, 義理の姉妹	シンデレラ VS 父 (継母, 義理の姉妹) 『さびしいシンデレラ』とネズミの合唱	ネズミ ドゥアアップ	○
III ネズミとシンデ レラの出会	2シンデレラ, ネズミ	ネズミに驚くシンデレラ 大嫌いなネズミと次第に仲良くなっていく	シンデレラと出 会うネズミ	×
IV 城からの招待状	大臣, 家来	大臣と家来によるパーティの発表		×
V 魔女と シンデレラ	3シンデレラ, 魔女, ネズミ	魔女登場『魔女のテーマ』, わがまま なシンデレラ, 魔女 VS シンデレラ, ネズミの仲裁	魔女にシンデ レラの事を頼むネ ズミ	○
VI 舞踏会	4シンデレラ, 王子, 他	王子とシンデレラの出会, 12時に なったらどうする? 片方の靴は誰 の?	踊るネズミ達	○
VII 結末	5シンデレラ, 他	? (子ども達に考えさせる)	?のネズミ達	×

※上演時間は、1シーン約5分×7場面＝約35分とする。

メインキャストは、中高生38名による〔シンデレラ5名, 父1名, 継母1名, 姉妹多数, 王子1名, 大臣・家来多数, 魔女多数〕と設定する。また、小学1～3年生50名及び、4～6年生35名のキャストをネズミ役として設定し、〔第I場面35名, 第II, V場面15名, 第VII場面20名〕に登場させる。但し、低学年は、第VI場面のみ全員登場する。

【表3】 子ども達の創作による「わがままなシンデレラ」ストーリー

場面	場所	時	登場人物の行動	歌
I	屋根裏にあるネズミ一家のダイニングルーム	夕方	夕食の支度に忙しい母ネズミ、喧嘩をする赤ちゃんネズミ、宿題をする子ネズミと雑誌を読む子ネズミ、お茶を飲んでいる祖母ネズミ。そこへ父ネズミが帰宅する。そして、皆で夕食を取りながらシンデレラの話(子ネズミ達はシンデレラの悪口を言い合うが、祖母ネズミはシンデレラの不辛な生い立ちを語り同情する)。	×
II	居間、シンデレラの部屋	昼	父が、シンデレラに新しい母と姉妹を紹介する。3人はシンデレラのピアノを勝手に弾いている。母と姉妹VSシンデレラ。次に、姉妹とシンデレラはテレビのチャンネルを奪い合う。喧嘩に負けたシンデレラは自分の部屋に駆け込み、泣きながら『さびしいシンデレラ』を歌う。そこへシンデレラを慰めにネズミ達が歌いながら登場する。	○
III	シンデレラの部屋、居間	夕方	シンデレラは嫌いなネズミを居間に追いつめる。ネズミはピアノの下に隠れる。ピアノを見て死んだ母を思い出したシンデレラは泣き出す。すると母の幻が現れ、ネズミと仲良しになる様論す。ネズミはシンデレラの言いなりである。	×
IV	玄関	朝	家来を連れて大臣がパーティの招待状を持って来る。大臣は悪い奴である。大臣の悪巧みをばらすネズミ。	×
V	シンデレラの部屋	昼	姉達だけに届いた招待状を見たいシンデレラは、ネズミに招待状を盗ませる。ネズミはシンデレラをパーティに出席させるため、魔女に頼んで支度をさせる。ネズミは魔女とシンデレラの仲裁役になる。	×
VI	お城の広間	夜	舞踏会は王子とのカラオケ二重唱大会。シンデレラの順番がようやく回って来たのに、マザコンの王子は「12時には帰る」と言うのでシンデレラは怒って王子に靴を投げつける。人間に化けたネズミ達が騒いでいる。	×
VII	シンデレラの家	朝	王子に靴を投げつけた犯人を捜しに来た王子と家来は、シンデレラを見つけて連行しようとするが、継母と姉妹が団結して王子達をやっつける。王子の捨て台詞「ママに言いつけてやる！」	○

【譜例1】 「さびしいシンデレラ」

シンデレラ

1. わたしは さびしい シンデレラ
ひとり ぼちの

2. シンデレラ

ネズミ

おもい たのほ やさしいかさんの おもい
おもい たのほ やさしいかさんの おもい